

第5回 本間久雄のワイルド研究

本間は明治以来、ワイルドを多く論じてきた。『早稲田文学』への発表はもとより、単行本としても大正2年(1913)2月の『高台より』(春陽堂)には明治44年(1911)3月に発表した「オスカー・ワイルド論」を収録、大正6年(1917)6月の『近代文学之研究』ではワイルドに関する論文が多く収録されている。ここでは『近代文学之研究』について簡単に触れた後、特に『近代名著評釈』と『唯美主義者 オスカア・ワイルド』を取り上げておきたい。

(1) 『近代文学之研究』

大正6年(1917)6月に出版された『近代文学之研究』(北文館)はこれまで発表されたものを収録したものである。ワイルドに関する収録内容と初出は以下の通りである。

「ワイルド傳中の一つの謎」(『早稲田文学』第121号、1915年12月)

「獄中のワイルド」(『早稲田文学』第118号、1915年9月)

「ワイルドとダヌンチオ」(『早稲田文学』第95号、1913年10月)

「谷崎潤一郎」(『文章世界』第8巻第3号、1913年3月)

「谷崎潤一郎」についてはワイルドへの言及があるので紹介した。大正初期から中期にかけての本間久雄のワイルド研究について清水義和(b.1946)は次のように紹介している。

本間、同年9月「獄中のワイルド」を発表し、その中で、ロバート、シェラルドの『ワイルド伝』にある、ワイルドが入獄した監獄の看守であったマーチンが寄稿した論文「獄中のワイルド」の概略を示した。続いて、本間は、同年10月、前稿の続編「獄中のワイルド」(『大正文学』第2巻第9号)を発表し、又、同年11月「エレン・ケイ思想の真髓」(大

同館)を執筆した。次に、本間は、同年11月「ワイルド伝中の一つの謎」(『早稲田文学』121号)を発表し、その中で、ダグラスが『オスカー、ワイルドと余』で示し、又、シェラルドが『ワイルド伝』で示した謙虚なワイルド像との相違を「謎」として提示した。結局、本間は、当時、未公開であった部分を含む『獄中記』の全てが公表されれば、その謎は解明できると推論した。⁽¹⁾

本間はワイルドの生涯について、特に獄中生活前後のワイルドの内面の変化について注目している。「オスカー・ワイルド論」(1911)、「ワイルド伝中の一つの謎」(1915)、「オスカー・ワイルドの生涯」(1920)への変遷は、本間のワイルド研究の関心の方向を指し示すものである。本間の関心は獄中前、獄中生活、獄中後のワイルドのうち、獄中生活と獄中後へ向けられており、獄中でのワイルドについては一貫して

I now see that sorrow, being the supreme emotion of which man is capable, at once the type and test of all great Art. ... Sorrow is the ultimate type both in Life and Art. ⁽²⁾

と、ひとつの変化としてとらえ、引用し続けている。本間はワイルドの死後に出版されたワイルド伝からさらに獄中生活や獄中後の生活に関心を寄せた。本間のこの姿勢は、昭和9年(1934)の『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)にも現れている。「第7章 唯美主義の衰退」は「第1節 ワイルドの下獄誌」、「第2節『ディ・プロファデイス』」となっており、その文中においても「悲哀はワイルドにとって新しい生活の基礎であった」⁽³⁾としている。本間のワイルド研究は『英国近世唯美主義の研究』で大きくまとめられたのである。

(2) 『近代名著評釈』

大正7年(1918)5月に出版された『近代名著評釈』(春陽堂)は文藝研究叢

書第四篇として出版されたものである。『近代名著評釈』（春陽堂）の内容は以下の通りである。

- 第一章 文学鑑賞の順序
- 第二章 近代文学と世紀末傾向
- 第三章 ツルゲーネフ——『ルーヂン』——
- 第四章 ドストエフスキー——『罪と罰』——
- 第五章 トルストイ——『復活』——
- 第六章 フロオベエル——『ボワリイ夫人』——
- 第七章 モウパッサン——『水の上』——
- 第八章 イブセン——『人形の家』
- 第九章 オスカア・ワイルド——『ドリアン、グレーの絵姿』——
- 第十章 メエテルリンク——『青い鳥』——

ワイルドについては「第一章 文学鑑賞の順序」でも簡単に触れられているが、ここでは、「第二章 近代文学と世紀末傾向」と「第九章 オスカア・ワイルド——『ドリアン、グレーの絵姿』——」を取り上げる。「第二章 近代文学と世紀末傾向」はさらに

- 一 世紀末といふこと
- 二 「トスカ」（「世界苦」）の特質
- 三 デカダンの特質

の内容が収録されている。「一 世紀末といふこと」は「世紀末的思想は所謂近代文学の根本基調である」から始まる。⁽⁴⁾ また、近代文学論の権威としてマックス・ノルダウの『墮落論』（*Degeneration*）を紹介しているのである。おもにワイルドを扱っているのは、当然「第九章 オスカア・ワイルド——『ドリアン、グレーの絵姿』」を取り上げた。本間はデカダンの特徴をマック

ス・ノルダウの見解に従って5つの特徴を示した。デカダン思想の第1の特徴は反科学的傾向である。言い換えれば、神秘主義である。第2の特徴は「自己崇拜」的傾向、第3は技巧的なものを偏愛する傾向で、ワイルドを極端に達した者として扱い、第4は道徳・宗教・習慣など、社会制度に対して無感覚であり、自己の芸術のみ執着するという意味の無感覚であり、別な言葉で言えば、芸術至上主義である。第5は人生の醜悪な一面を偏愛する傾向、すなわち悪を偏重する傾向である。いわゆる悪魔主義のことである。本間のワイルド研究への傾倒振りについては、平成11年（1999）3月の清水義和『ショー・シェークスピア・ワイルド移入史』（文化書房博文社）がよい参考となる。

（3）「オスカア・ワイルドの生涯」

「オスカア・ワイルドの生涯」は明治44年(1911)3月の『早稲田文学』（第64号）に掲載された「オスカー・ワイルド論」の作品論の部分を除き、ランサムの *Oscar Wilde: A Critical Study* (1912)、イングルビーの *Oscar Wilde: Some Reminiscences* (1912)、ダグラスの *Oscar Wilde and Myself* (1914)などのワイルド伝からの引用などを加え、大正9年(1920)3月の矢口達編『ワイルド全集』（第1巻）（天佑社）の巻頭論文として発表されたものである。

本文は5つのパートに分かれている。第1パートではワイルドの文学者としての特徴がまず挙げられている。

彼れ自ら、その晩年の懺悔録とも見るべき『ド・プロファンデイス』の中で、自分の晩年の落魄は『文学的生活の當然に導いた結果である』と云ひ、又「自分は現代に對してシンボリックな地位にある」と云つてゐるが、彼れの自らさう云つてゐるまでもなく、彼れの變轉極りなき不思議な生涯は、實に深刻なる近代人そのもの、複雑なる近代生活そのものゝ象徴化である。彼れの生涯が、近代生活の上から見て特に重要視さる

べき所以はここにある。そしてこの重要視さるべき彼れの生涯は、同時に芸術の重要視さるべきことを語つてゐる。何となれば、彼れの生涯は、彼れの自らの云つてゐるやうに、彼れの芸術観そのものゝ生活化であるからである。この意味で彼れの芸術そのもの亦、近代文学中、最も注目すべき独自の地位を占めてゐると云ふべきである。⁽⁵⁾

その後はワイルドの生涯について時系列で記されている。オックフォード時代については以下のような記述がある。

オックスフォードで、彼れはラスキンのフロレンス美術の講義に侍した。尤もラスキンは間もなくベニスへ去つたので、ワイルドがラスキンの講義を聴いたのは、極く短い期間であつたが、しかしラスキンの影響は彼れに甚大なものであつたと傳へられる。彼れが所謂唯美主義運動に左袒し、後にそのチャンピオンとなつたのは、無論大部分は彼れの天性の気質によるではあらうが、一つは明かにラスキンの影響であつたと云はれてゐる。⁽⁶⁾

ラスキン、ペーター等の影響について触れているが、もちろんそれ以外にもワイルドに影響を与えたものもあるが、マファフィ教授については全く触れていないことも付け加えておきたい。ジョン・ペントランド・マファフィ (John Pentland Mahaffy, 1839-1919)はワイルドがギリシャ古典文化の源泉に触れる大いなる契機を与えた人物である。

彼れのオックスフォード在学中、彼れに影響を與へたのは上記ラスキンを始め、ウィリアム・モリス、バーン・ジョーンズ、ウォールター・ペイター等であつたと傳へられる。⁽⁷⁾

パート2ではおもにアメリカ講演について取り上げられ、パート3ではアメ

リカ講演以降のことで、コンスタンス・メアリー・ロイド(Constance Mary Lyod, 1858-1898)との結婚、牢獄に下るまでのことが記されている。作品については紹介程度である。パート4は獄中に関すること、また、『ド・プロファンデース』についても取り上げられている。『ド・プロファンデース』からは、「栄華、快楽、成功などいふものは、粗野な、平凡な、つまらぬものであるが、悲哀はこの世におけるあらゆるものゝ中で最も感受的な、核心的なものである」、「悲哀のあるところ、そこに聖地のある」ことなどが紹介されている。⁽⁸⁾パート5では出獄からワイルドの死までが書かれている。特にアルフレッド・ダグラスとの交友関係が復興して来たことなどが、ランサム、イングルビー等のワイルド伝を引き合いに出しながら論じている。そして最後は以下のような文章で結ばれている。

世紀末の兒たるワイルド、「自分は現代に對してシンボリックな地位にある」と自ら言明したワイルド、そのワイルドの芸術と生活とは、わが読書界の新人に、果たしてどういふ意義と暗示とを與へるであろうか。⁽⁹⁾

(4) 『唯美主義者オスカア・ワイルド』

大正12年(1923)10月の本間久雄『唯美主義者 オスカア・ワイルド』(春秋社)は、「ワイルド傳中の一つの謎」(初出『早稲田文学』第121号, 1915年12月)、「獄中のワイルド」(初出『早稲田文学』第118号, 1915年9月)、「ワイルドの快樂主義——ダヌンチオとの比較——」(初出『早稲田文学』第95号, 1913年10月)、「ワイルドの生涯」(初出『早稲田文学』第64号, 1911年4月)と、これまで発表したものを改題等を施してまとめたものである。本書に掲載された「ワイルドの快樂主義——ダヌンチオとの比較——」はもともとは「ワイルドとダヌンチオ」の題名で発表されたものである。

本間久雄は「人生も自然も芸術の模倣也」(『文章世界』第5巻第4号, 1909年3月)以来、ワイルドに関する論文を次々と発表して来た。本間は *The*

Decay of Lying をまず紹介したが、*De Profundis* や *The Picture of Dorian Gray* の翻訳を経て、本間の関心はワイルドの獄中生活と獄中後に向けられた。必然的に作品としては *De Profundis* に関心に向けられ、いち早く翻訳にも取り組んだのである。しかし、本間の関心は前述のワイルド像の相違に向けられたのである。

本間は単にワイルドの紹介にとどまらず、同時期に出版されたワイルド伝の比較から「ワイルド伝中の一つの謎」の中では、アーサー・ランサム の *Oscar Wilde: A Critical Study* (1912) とアルフレッド・ダグラスの *Oscar Wilde and Myself* (1914) のワイルド像の相違を「ワイルド伝中の謎」としたのである。ランサムの *Oscar Wilde: A Critical Study* はダグラスとの間に訴訟沙汰を引き起こすことになったことでも知られている。

ダグラスについては一度も名前を出して触れていないけれども、彼がワイルドを誤らせ、墮落させ、そして見捨てたように受け取られるところから、彼は名誉棄損を訴えたのである。出版社は本書の権利を売り、ダグラスは訴訟を起こした。この訴訟の背景には、ランサムがロバート・ロスから資料の提供を受けていたことと、ワイルドとの愛情をめぐるダグラスとロスという男色同士のかつてのライバル関係も絡んでいた。法廷では無削除版の『獄中記』が読み上げられたり、ダグラスに対する詰問があったりして、最後はランサムの勝訴に終わる。⁽¹⁰⁾

この時期のワイルド伝には以下のものがある。

- 1902 R.H. Sherard. *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy Friendship.*
- 1905 Andre Gide. Stuart Mason, translator. *Oscar Wilde: In Memoriam.*
- 1907 Leonard Cressewell Ingleby. *Oscar Wilde.*

- 1911 Anna Comtesse de Brémont. *Oscar Wilde and His Mother: Memoir.*
- 1912 Arthur Ransome. *Oscar Wilde: A Critical Study.*
- 1912 Leonard Cressewell Ingleby. *Oscar Wilde: Some Reminiscences.*
- 1914 Alfred Douglas. *Oscar Wilde and Myself.*

本間はワイルドの遺稿管理人であるロバート・ロスにより、昭和 35 年(1960)まで大英博物館に保管されることになっていた *De Profundis* の未公表部分が公開されれば、この謎は解明できるものと推論したのである。

(5) その他

大正時代の本間久雄のワイルド研究の全体的な流れを知る上で、まず大正時代の本間久雄のワイルド研究関連の著作年譜を作成したので紹介しておきたい。

- 大正 元年(1912) 9月 『新潮』(第 17 卷第 3 号)に翻訳「意外」を發表。
- 大正 2 年(1913) 2月 『高台より』(春陽堂)を出版。「オスカア・ワイルド論」を収録。
- 大正 2 年(1913) 3月 『文章世界』(第 8 卷第 3 号)に「谷崎潤一郎論」を發表。
- 大正 2 年(1913) 4月 翻訳『遊蕩児』(新潮社)を出版。『ドリアン・グレイの肖像』の翻訳。
- 大正 2 年(1913) 5月 『新潮』(第 18 卷第 5 号)に「『遊蕩児』に於て作者は何を描かんとしたか」を發表。
- 大正 2 年(1913) 7月 文芸協会解散。島村抱月、芸術座を結成。早稲田大学教授を辞す。

- 大正 2年(1913)10月 『早稲田文学』(第95号)に「ワイルドとダヌンチオ」を發表。
- 大正 2年(1913)12月 『近代』(創刊号)に『『サロメ』と『秋夕夢』』を發表。
- 大正 3年(1914)1月 『演芸画報』(第8年第1号)に『『先代萩』と『サロメ』』を發表。
- 大正 3年(1914)9月 『雄弁』(第5巻第9号)に「ワイルド雜記」を發表。
- 大正 3年(1914)11月 『早稲田文学』(第108号)に「オスカア・ワイルドに関する一新書」を發表。
- 大正 4年(1915)1月 『早稲田文学』(第110号)に翻訳「ペン、鉛筆及び毒藥」を發表。
- 大正 4年(1915)5月 『新潮』(第22巻第5号)に翻訳「審判の家」を發表。
- 大正 4年(1915)6月 『早稲田文学』(第115号)に「二つの『サロメ』劇」を發表。
- 大正 4年(1915)9月 『早稲田文学』(第118号)に「獄中のワイルド」を發表。
- 大正 4年(1915)10月 『大正文学』(第2巻第9号)に「獄中のワイルド」を發表。
- 大正 4年(1915)12月 『早稲田文学』(第121号)に「ワイルド伝中の一つの謎」を發表。
- 大正 5年(1916)5月 『早稲田文学』(第126号)に翻訳『『フロレンスの悲劇』』を發表。
- 大正 5年(1916)10月 『早稲田文学』(第131号)に翻訳「星の子供」を發表。
- 大正 5年(1916)12月 翻訳『柘榴の家』(春陽堂)を出版。
- 大正 6年(1917)6月 『近代文学之研究』(北文館)を出版。

- 大正 6年(1917)7月 『早稲田文学』(第140号)にブレモン伯爵夫人「オスカア・ワイルド追憶記」を翻訳。
- 大正 7年(1918) 早稲田大学講師となる。『早稲田文学』編集主幹となる。(～昭和2年12月まで)
- 大正 7年(1918)4月 文芸会主催講演「オスカア・ワイルド下獄事状」(於：早稲田大学恩賜館)
- 大正 7年(1918)5月 『近代名著評釈』(春陽堂)を出版。
- 大正 7年(1918)11月5日 島村抱月死去。
- 大正 9年(1920)3月 『文章倶楽部』(第5巻第3号)に「オスカア・ワイルド(近代文豪傳)」を發表。
- 大正 9年(1920)3月 矢口達監修『ワイルド全集』(全5巻, 天佑社)の第1巻に「ワイルドの生涯」を發表。
- 大正 9年(1920)4月 矢口達監修『ワイルド全集』(全5巻, 天佑社)の第2巻に翻訳「フロレンスの悲劇」を發表。
- 大正 9年(1934)4月 『早稲田文学』(第173号)に翻訳「個人主義と社会主義」を發表。
- 大正 9年(1920)7月 矢口達監修『ワイルド全集』(全5巻, 天佑社)の第5巻に翻訳「ペン、鉛筆及毒薬」と翻訳「社会主義と人間の靈魂」を發表。
- 大正 9年(1920)7月 翻訳『社会主義と人間の靈魂』(新潮社)を出版。
- 大正 12年(1923)10月 『唯美主義者 オスカア・ワイルド』(春秋社)を出版。
- 大正 14年(1925)1月 『早稲田文学』(第227号)に「近世英文学上の快樂主義」を發表。
- 大正 14年(1925)2月 『早稲田文学』(第228号)に「近世英文学上の頽廢派の運動」を發表。
- 大正 15年(1926)6月 『文芸思想研究』(第3巻)に「近世英文学上の唯美運動(一)」を發表。

本間が評論や翻訳に大いに取り組んでいたことは一目瞭然である。本間はワイルドだけを研究していたのではない。トルストイ、シェイクスピア、モリスはもちろん、谷崎潤一郎、小川未明、鈴木三重吉、美学に関する論文等を発表している。こうした関連の中でワイルドに言及されることも多く、多面的にワイルドに取り組んだのだ。

まとめ

本間久雄は明治時代には *The Decay of Lying, De Profundis* からワイルドの芸術観を紹介し、大正時代には翻訳、評論を次々と発表し、ワイルドの芸術観をさらに鮮明にした。

本間久雄の恩師である島村抱月主宰の芸術座の『サロメ』上演の劇評なども発表しているが、ワイルド劇については作品論にとどまり、上演論までにはあまり踏み込んでいないことが本間久雄の研究上の課題であると言ってもよいだろう。本間の研究は昭和初期のイギリス留学を経て、さらに大きなステップ・アップがあったことは付け加えておきたい。その成果はもちろん、昭和9年(1934)11月の『英国近世唯美主義の研究』（東京堂）として発表されることになるのだ。

参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、2001年6月)

佐々木隆「本間久雄のワイルド研究——大正時代——」(『日欧比較文化研究』第6号、日欧比較文化研究会、2006年10月)

佐々木隆『書誌から見た日本ワイルド受容研究(明治編)』イーコン、2006年11月

注

- (1) 清水義和『ショー・シェークスピア・ワイルド移入史』（文化書房博文社、1999年3月）、p.309.
- (2) *Complete Works of Oscar Wilde* (Harper & Row, 1989), pp.919-920.
- (3) 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』（東京堂、1934年11月）、p.403.
- (4) 本間久雄『近代名著評釈』（春陽堂、1918年5月）、p.8.
- (5) 本間久雄「オスカア・ワイルドの生涯」（矢口達編『ワイルド全集』第1巻、天佑社、1920年3月）、pp.3-4.
- (6) Ibid., p.5.
- (7) Ibid., p.6.
- (8) Ibid., p.17.
- (9) Ibid., p.32.
- (10) 澤井勇「ランサム、アーサー」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月）、p.447.